



城

第四十一回 九戸城

～秀吉による天下統一の最終戦・九戸政実の乱～

山本 忠博

秀吉による天下統一は、関東の北条氏を撃った小田原征伐(1590年)で、実質的に達成されたと言って良いでしょう。とはいえ、小田原に参陣しなかった関東以北の緒将は少なくなく、秀吉が、小田原征伐で、国内の敵対勢力を全て屈伏し終えたとは言えません。

今回は、小田原征伐前後の奥州の状況を追いながら、天下統一の総仕上げの経緯を見ていきます。そして、天下統一の最終戦の舞台となる九戸城(現岩手県二戸市)について、書くことにしましょう。

南部一族とは

今回注目するのは、北東北の名族である南部一族です。南部氏は、甲斐国(現山梨県)の武田氏と祖を同じくする甲斐源氏の一流で、もともとは、甲斐国南部郷(現山梨県南部町)を、本拠にしていました。この南部氏が、源頼朝による奥州征伐(1189年)で軍功をあげ、陸奥国糠部郡(現在の青森県東部から岩手県北部)を与えられたことにより、奥州に勢力を張ることになります。

さて、今回は、南部一族の登場人物が多くなるので、予めその紹介をしておきましょう。ただし、南部一族の系譜や事績については、記録を残した者の立場によってかなりの異同があるので、以下の記載は、あくまでも有力な一説を書いたものとご理解ください。

南部晴政 戦国時代に、南部氏の実質的な宗家となった三戸南部氏の長。南部氏24代。戦国時代の南部氏最盛期を築いた人物。晩年は、実子に家督を継がせるために、婿養子の南部信直と対立し、南部一族を二分することに。後述する一族の九戸政実とは、盟友関係。

南部信直 晴政の従弟で婿養子。晴政の実子の死後に、南部氏26代に。豊臣秀吉の後ろ楯を得て、名実共に南部氏の宗家となり、同氏を近世代名化することに成功した人物。

九戸政実 南部氏の支族。三戸南部氏の家臣というよりは、盟友関係にあったと捉えた方が実情に近い。晴政が信直と

対立したため、政実も信直と対立。後に信直と決裂した結果、九戸城にて、豊臣秀吉の奥州仕置軍と戦うことに。

大浦(津軽)為信 南部氏の支族。晴政、政実と信直が対立し、両陣営が思い通りに身動きが取れない中で、三戸南部氏に叛いて南部領だった津軽地方を奪取。豊臣秀吉に周到に根回しし、秀吉から、独立した大名と認められる。

小田原征伐までの北奥州

北奥州の戦国時代の中心人物は、南部晴政です。当時の北奥州には、南部氏の一族だけでもかなりの数がありましたが、晴政は、これらの一族の盟主としての地位を築きあげました。そして、盟友の九戸政実等の協力のもと、現在の青森県から岩手県中部に到る領域に勢力を張り、「三日月の丸くなるまで南部領」(旅で三日月の頃に南部領に入ると、出る頃には満月になっているほど、南部領は広大)と言われるほどになりました。

晴政は、勢力拡大中の1565年の時点で、男子がなかったため、従弟の信直を長女の婿に入れ、養嗣子としました。しかし、1570年に晴政に男子が誕生すると、晴政と信直の仲は次第に険悪になり、南部一族は、晴政と九戸政実の連衡勢力と信直を担ぐ勢力とに分かれることになります。

晴政は、1582年に死去したとされます。これにともなう晴政の実子が南部家の家督を継ぎ、家督問題は一応の決着をみました。しかし、この実子は同年のうちに死去し、南部家は、またも継承問題で揺れることになります。この時の、次期当主の有力候補は二人です。一人は前出の信直で、もう一人は、九戸政実の弟でした。南部一族の評定の結果として、最終的に信直が家督を継ぐこととなりますが、このことで、信直と政実の対立がより鮮明になります。

さて、晴政、政実と信直が対立していた間に、南部領だった津軽では、大浦為信が活発に動いていました。為信は、まず、1571年に津軽に居た信直の実父を急襲して、津軽の南部領を横領します。その後も、晴政、信直が活発に動けない中で、津軽地方を次第に切り取ります。また、為信は、

早くから豊臣秀吉に接触し、津軽の領主としての権威付けを着々と整えていきました。

小田原征伐時

戦国時代の末期に至っても、北奥州は、南部一族間の争いが収まっていませんでした。しかし、彼等の思惑を越えて、天下は動いていました。豊臣秀吉の小田原征伐が始まったのです(1590年)。この時に彼等に迫られたのは、秀吉に服従するか否かです。

大浦為信は、小田原征伐前から秀吉に献上品を送り、さらに、小田原征伐が本格化する前に秀吉に謁見したため、秀吉から早々に津軽の領地を安堵されました。

南部信直は、為信に遅れること1ヶ月で小田原に参陣し、津軽以外の南部領の安堵と、南部宗家としての地位を保障されました。ただ、繰り返し、為信の討伐と津軽の返還を訴えたものの、その点は受け入れられませんでした。秀吉からすると、一度出してしまった為信への安堵の約束を、撤回するわけにいなかったのです。ちなみに、この問題は後々まで尾を引き、江戸時代に到っても、幕府が手を焼くほど、南部藩と津軽藩の仲は険悪な状態が続きました。

ところで、九戸政実とはいうと、前出の2者とは対照的に、秀吉に服従する態度をいっさいとっていません。

小田原征伐後

秀吉の小田原征伐における、諸大名への対応の仕方は、ある意味、単純です。すみやかに小田原に参陣した大名は基本的に本領安堵で、参陣しなかった大名は取り潰しです。ただ、参陣しなかったからといって、ただちに取り潰しというわけではなく、参陣した大名の家臣としてなら生き残る道がありました。南部一族の場合は、もともと同族連合的な集まりで、それぞれに独立した大名のようであったとはいえ、三戸南部氏への協力者という意味では、家臣のような位置付けにいたとも取れ、南部信直の家臣としてなら生き残ることができました。

そうすると、九戸政実にも信直の家臣として生き残る道があったのですが、政実は、自分こそが南部宗家に相応しいとさえ思っていたので、それを受け入れることはできませんでした。政実からすれば、盟友だった晴政の三戸南部家を、晴政と敵対していた信直にかすめ取られたと思っていたでしょうし、中央政権の主従関係を押し付けてくる信直を、虎の威を借る狐と見ていたでしょう。

九戸政実の乱

1591年正月、政実は、信直への正月参賀を拒絶して叛意を示し、3月には、5千の兵で決起しました。これを後世では、

九戸政実の乱と呼んでいます。政実が決起する前から、奥羽では、秀吉の仕置きに対する不満から一揆が頻発していたこともあって、政実の軍は勢いに乗ります。信直側は防戦一方となり、ついには自身での平定を諦めて、秀吉に助けを乞うことになります。

これに対して秀吉は、6月に豊臣秀次^{ひでつぐ}を総大将とする仕置軍を編成し、奥羽の一揆と九戸政実の乱を平定すべく北上させます。仕置軍は、各地の一揆を平定しながら、8月下旬に南部領付近まで攻め上がりました。南部領に攻め入った仕置軍がどの程度だったかは諸説ありますが、一説に6万だったといえます。その指揮官も、蒲生氏郷^{がもうじきと}、浅野長政^{あさのながまさ}、井伊直政^{い い なおまさ}といった、豊臣、徳川配下の一級の武将が名を連ねており、かなり大規模な陣容であったと想像されます。

九戸側は、仕置軍に夜襲をかけて戦果を挙げますが、大軍勢に押し込まれて、九月月上旬には九戸城に立て籠もることになります。そして、政実達が城に立て籠もってすぐに本格的な城攻めが始まりました。しかし、九戸城は、東、西、北の三方を3本の河川で囲まれた天然の要害です。仕置軍側も、短期間の戦闘で容易に落ちないことを悟ったのか、すぐに謀略を使いました。

仕置軍側は、政実の旧知の僧を使者に立てて、開城すれば城に籠もった者達の命を助けると伝えさせ、政実に城の明け渡しの説得を行いました。そして、政実もこれに折れ、仕置軍に降伏することにします。しかし、仕置き軍側は、政実が城から出てきたところで、助命の件を反故にし、城に残っていた者達を二の丸に押し込めて撫で斬りにしたうえ、城に火をかけたと伝わります。そして、政実他の首謀者は処刑されました。

これ以降、秀吉政権への組織だった抵抗はなくなり、この乱の終結をもって、豊臣秀吉の天下統一は完全に達成されたといえます。

現在の九戸城

現在、国の史跡に指定され、土塁や空堀が良く整備されて残っています。本丸には、東北最古といわれる石垣が残っていますが、これは、乱後に改修された部分です。史跡公園には桜の名所もありますので、春先に訪れれば、きっと見事な景色が眺められるでしょう。



九戸城跡南石垣発掘写真(二戸市教育委員会提供)